

《資料紹介》

「武田泰淳年譜」未記載の対談

――「レーニンの新しい魅力」について――

長田 真紀

OSADA Maki

キーワード：武田泰淳、対談「レーニンの新しい魅力」、江口朴郎

二

一

武田泰淳が、『世界の名著 第52巻 レーニン』（中央公論社 昭和四十一年五月）の「付録4」において、江口朴郎との対談「レーニンの新しい魅力」を行っていることをこのたび確認した。

この対談については、武田泰淳年譜の定本ともいえるべき古林尚氏による『武田泰淳年譜』『増補 武田泰淳全集』の別巻『増補 武田泰淳研究』（昭和五十五年三月 筑摩書房 収録）にもその存在の記載が全くない。本稿では、この対談「レーニンの新しい魅力」について紹介し、武田泰

淳文学誌の空白を埋めたい。

『世界の名著 第52巻 レーニン』は、江口朴郎の責任編集で、昭和四十一年（一九六六）五月二十日に中央公論社から発行された。江口朴郎の論考「レーニンと現代の課題」が巻頭に置かれ、以下のレーニンの著作の翻訳が収録されている。

『貧農に訴える』（日南田静真訳）

『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』（西島有厚訳）

『資本主義の最高の段階としての帝国主義』（和田春樹訳）

『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」について』

（相田重夫訳）

『国家と革命』（菊地昌典訳）

江口朴郎は、明治四十四年（一九一）佐賀県生まれ。第一高等学校、東京帝国大学文学部西洋史学科を卒業。姫路高等学校教授、第一高等学校教授を経て、本書刊行当時は東京大学教養学部教授を務めていた。いわゆるマルクス主義史観の歴史学者で、歴史学研究会の委員長も務めた。主著には、『帝國主義と民族』『歴史の現段階』などがある。平成元年（一九八九）、七十七歳で歿。妻の久子は評論家・江藤淳の従姉である。

三

本書には、武田泰淳と江口朴郎の十二頁にわたる対談が「付録4」として挟み込まれた。「付録4」であるのは、『世界の名著 第52巻 レーニン』が、このシリーズの第四回配本であつたからである。対談は、昭和四十一年（一九六六）四月二十五日、虎ノ門の料亭「福田家」で行われたことが記されている。

対談「レーニンの新しい魅力」は、「レーニンとの出会い」「変革者としてのレーニン」「指導者の問題」「レーニンの翻訳について」という四構成になっている。

レーニンの著作の新訳本に付された対談であるので、言うまでもなく新訳刊行を評価する立場で武田泰淳の発言もなされている。

こんどの訳では、論文の文章の調子が変わっていて、レーニンの態度がよく出ていると思う。からかっているとか、論争的にやるといふばあいと、検閲を意識して、ひじょうに注意ぶかく書いてある文体と、その調子のちがいがとてもよく出ていると思います。だいたい、ロシア語の翻訳は、いちばん悪かったと思う。ロシア語の社会主義文献の

翻訳にはずいぶんひどいがある。読んでもわからない。読むと、なんだか疑わしくなってくるようなものがあつたですからね。

また、青年時代の武田泰淳自身のレーニンへの思いについては、次のように語られている。

ぼくのばあい、最初は、冒険というか革命好みというか、アナキストのテロリストの血わき肉躍るような話が目につきました。ロマンティックに感じたのですね。それから、スパーマンというか、すごぶる頭がよくて千人分くらいのことを一人でやつてのける男がいるという感じで、レーニンにひかれたわけです。

武田泰淳の青年時代における左翼運動体験については、すでに拙稿^①で詳細に論じているのでここでは差し控える。しかし、昭和六年（一九三二）五月三十日に東京中央郵便局へゼネストを呼び掛けるビラ撒きに行き、逮捕され拘置されるという「中央郵便局事件」をピークとする武田泰淳の左翼運動への参加とその挫折は、武田泰淳の人生の重大な曲折となり、相当地に深刻な痕跡を残した。「冒険というか革命好みというか」というレベルであつたとは到底考えられない。仮にそうであつたとしたならば、左翼運動についての認識の甘さが、大きなしつぺ返しを自らの人生に招いたといわざるを得ない。

この対談は、青年時代の左翼運動への参加と挫折の経験から三十五年後のものであり、加えて戦後という時代も二十一年目となつた時点のものである。挫折の傷や痛みは薄れ、自嘲的に青年時代を追憶する心情も含まれていると考えられる。

さて、対談のなかで、レーニン研究の専門家である江口朴郎よりも、文
学者である武田泰淳の方が、ソビエトという中央集権的国家の性質を看
破し、政治の本質を的確に捉えている発言がある。

国家を守るためには敵がないと困るわけです。ロシア革命のあとは
惨憺たるもので、中国の自然災害よりもっとひどいものでしたが、し
かしあのときは、諸外国が侵入してきて、自分たちを滅ぼそうとして
いるのだという敵対感から、どうしてもいまここで中央集権をやら
なければならぬということがあったと思うのです。（中略）敵をつ
くらなければ、民主主義という内容があっても、国民は団結しにくい
のですからね。一種の恐怖というか、敵対感・緊張感をつくりだすも
のがないと困るわけです。

たとえば、「独占」とか「独裁」という言葉がレーニンにはさかんに
出てきますが、「正」と「裁」とはどう違うかというような印象があ
るわけです。感覚的にはね。「独占」のほうはひじょうに悪くて「独
裁」のほうはいいあいがあるとか、ヒトラーの独裁が悪ければプロ
レタリアートの独裁も悪いのではないかと、単純に考えればそう
なっちゃうわけです。ブルジョワジーの独裁ということもあります
し、（中略）プロレタリアートの独裁がなければいままでのエゴイズ
ムは絶対に消滅しないのだと言っても、独裁があるからにはエゴイ
ズムもあるのではないかと、疑念をいだかせることもあると思うの
です。

また、政治指導者の存在について、武田泰淳と同様に戦後派作家であっ

た堀田善衛の発言を引きながら、次のように述べているところも注目さ
れる。

自由はなくなるけれども、ある程度、自分は演出者でもあるし、
フィクションをつくれる、つくっているということは、やはり行動者
ですね。堀田善衛君が言っていたのですが、インタナショナルリズムと
いうのは結局フィクションだ、それは少数の人しかわからないし、少
数の人にはわかっていてもらわなくちゃ困る、と。そういう問題は全
部にわかりつこないと言っているのです。

四

武田泰淳は、日本文学史において、政治や政治的人間に終始強い興味と
関心を抱き、その実相を文学化しようとアプローチし続けた稀有な作家
である。それは、政治の洞察、批判、諷刺と密接な関わりを古来から持つ
中国文学に、武田泰淳が深く親炙し、文学者としての出発点もそこにあつ
たことにも大きく由来する。

武田泰淳が昭和十八年（一九四三）四月に刊行した書き下ろし評論『司
馬遷』^②は、武田泰淳の実質的なデビュー作であり、数年後には戦後派作家
として開花していくことになる武田泰淳の文学の核なるものや本質を多
分に有している極めて重要な作品である。そこでは、政治や政治的人間が
次のように語られた。

世界の歴史は政治の歴史である。政治だけが世界をかたちづくる。
政治をになふものが世界をになふ。「史記」の意味する政治とは「動

かすもの」のことである。世界を動かすものの意味である。歴史の動力となるもの、世界の動力となるもの、それが政治的人間である。政治的人間こそは「史記」の主體をなす存在である。政治的人間は、世界の中心となる。

司馬遷は人間を政治的人間としてとりあつかふことを忘れなかった。人間が世界の中心となり、分裂する集團となり、獨立する個人となるためには、政治的人間にならなければならない。政治的人間としてとりあつかはれた人間だけが、歴史の舞臺に於て、一つの役目をもつことができる。そして役目をもたされた人物として、歴史劇に登場することを許される。

一九一七年（大正六）、ロシア革命が起き、世界史初のソビエト政権が樹立した。その最たる政治指導者であるレーニン（本名ウラジーミル・イリイチ・ウリヤノフ）は、強烈な「政治的人間」にほかならず、二十世紀の世界の「歴史の舞臺」に登場し、「世界を動かす」主体者の一人となった。対談での武田泰淳の発言のように、「演出者」として「フィクションをつくれる、つくっている」立場であり、「一種の恐怖というか、敵対感・緊張感をつくりだ」しながら、病死した一九二四年（大正十三）以降も、長らく世界に大きな影響力を持ち続けた。

武田泰淳も青年時代にその大きな影響を受けた者の一人であり、左翼運動という政治運動に挫折、脱落したことで、逆に「政治」や「政治的人間」を凝視し描き出していく文学者としての道を方向つけた。

この対談は、自らの青年時代を振り返りつつ、左翼運動の挫折後、多くの辛酸をなめながら三十五年という歳月を生き、逆に、武田泰淳という文

学者だけが掴み得た政治の本質が述べられている点で、看過できないものと言えよう。

注

① 拙稿「武田泰淳の軌跡——中央郵便局事件とその揺曳——」（二）

松學全大学大学院紀要「二松」第七号 平成四年三月）

② 東洋思想叢書『司馬遷』昭和十八年三月三十日 第一刷印刷 同年

四月五日 第一刷発行（三〇〇〇部）日本評論社

なお、本稿の引用はこの版に拠るものとする。仮名遣いはもちろん、旧漢字も可能な限りこれに従った。